一編集者が見た小西友七先生

中嶋孝雄（もと三省堂）

(1)

闇は深かった。突然、私の体は寝床の中で突き上げられ、そうして奈落の底に突き落とされた。激烈な振動と共に、闇の四方から固い物体が私に襲いかかった。それが周囲の書棚から落下してきた本の山だと認識できたのは数秒後のことであった。私は本に埋もれて身動きが取れなかった。光はどこからも来なかった。ただ自分がこれといったけがもせずに生きているということだけは分かった。巨大な地震に見舞われたようだった。それからどれほどたったか。「お父さん、大丈夫？」と必死に私を呼ぶ娘の声が近づいた。近くに住んでいる娘が様子を見に来てくれたのだ。「大丈夫だ。お母さんは？」「お母さんも大丈夫だわ」「美津子のところはどうか」「皆、大丈夫」「そうか、よかった。今は身動きが取れない。明るくなったら助けに来てくれ」私は自分でも意外なほど落ち着いていた。1995年1月17日、後に阪神・淡路大震災と名付けられた大地震に見舞われた直後の様子である。

私は前の年9月10日に喜寿(77歳)を迎えたところだった。しばらく前に、私は腸の手術を受け体力も十分には回復していなかった。よく生きていられと自分の命強さを思った。ともかく生きているのだ。敵の銃撃から逃れて民家の陰に部下と共にいる。私は、50年前のあのビルマでの地獄のような日々をまざまざと思い出していた。その戦いは、インパール作戦と名付けられていた。三師団とも壊滅的打撃を受け、8万8千人といわれた将兵のうち、生きて帰った者は2万に満たないという。太平洋戦争中最も愚かな作戦であった。私は機甲部隊の少尉として、この作戦のために転戦命令を受けた。1944年3月、日本軍は南方戦線の各所で負け、軍用車両はわずか26個中隊しかこの作戦に参加できなかった。その中に入ったのだから運が悪いといえば運が悪かった。だがインパールへ赴かなかつたら別の場所で戦死していたのかもしれないのだ。雨季に入る前に戦闘は決着がつくはずであった。中国の重慶への兵器の補給路をビルマ国境に近いインドの都市インパールで断つのが目的であった。しかし、国境付近のビルマ領には北東に行く手をはばむアラカン山脈があり、高い山は3千メートルもあった。この山越えは難事で、道は狭く、車は通れなかった。荷を運ぶ馬や牛も確保できず、歩兵は重い背囊（はいのう）をしょって、山を行くのだった。それは、昔、本で見た敗走するハンニバルの軍のアルプス越えを思い出させた。雨季に入って戦局は悪化の一途をたどった。インド・イギリス軍は空挺部隊をビルマに送り込んだ。背後からの攻撃を受け、わが軍は進退極まった。食料は欠乏し、ヘビを捕らえては露命をつなぐありさまである。渴をいやす水を求めて、運悪くマラリアにかかって死んでいった者も数知れない。トラック輸送もままならず、後方に向かうときなど、手を振り大声で助けを求める者も数知れなかった。助けてやれる数はわずかだった。道や山腹に倒れ、腐臭を放つ戦死者はほとんど無数と思われることもあった。それ故、わが退路は、

のちに、「白骨街道」と呼ばれるようになった。赤いビルマの土地は今思い出してもおぞましい。チャンドラ・ボースの率いるインド独立軍を支援する使命さえ担っていると聞かされていたわが軍は、密林の中で消え、かろうじて敗走してきた残兵の多くは白骨化するほかなかったのだ。こうした現実を目の前に突きつけられた私は生きて故郷に帰りたいとの思いが日々強くなると同時に、なぜ人はこのように殺し合えるのか、神はなぜこのように人を殺し合わせるのかなどの思いが野営の闇の中で堂々巡りをするのだった。そのつど、何故か、故郷の茶園で茶を摘む母の顔がまぶたに浮かんだ。母は強い日差しの中でほほえんでいた。終戦の時を待たず、われわれは捕虜として竹で囲った収容所に入れられ、強制労働につかされた。私は外国語専門学校を出ていたのでイギリス軍との間に立って通訳の仕事させられた。当初は、耳が英語に慣れていなかったのが苦労した。そうこうするうちに、日本の伝統文化に非常に興味を持っている連絡将校と出会い、能や歌舞伎のことを聞かれるようになった。彼の好奇心を満たすのは容易でなかった。私は、そんなこともあって、一日も早く日本へ帰りたいとの思いをつのらせた。中に、『ビルマの豎琴』に出て来る水島上等兵のように、ビルマに残ってあえなく死んでいった無数の日本兵を弔いたいという者もいたが.....。

私は夢想からさめた。いつの間にか、回りが白んでいた。夜が明け始めたのだ、と同時に私の回りに無数の紙の小片がばらまかれているのが見えた。長年にわたって蒐集した用例カードが、無残にもカードボックスから飛び出し、書斎一面に飛散してしまったのである。この膨大なカードを再び順序立てて使える日が来るのだろうか、私は不安だった。

ここまで書いてきたことは、私の想像の世界に現れた小西友七先生で、いわば、小説の世界に属することであるから、私はあることないことをない交ぜにして、読者の関心を引こうとしてきた。だが、これからは、小西先生やその周囲の人たちに起こった真実をお伝えすることになる。ただ何分にも 50 年にもわたる話で、私は記録とかメモを取る習慣がないので、書くうちに話に誤りや矛盾が生じるかもしれない。あらかじめご諒承を賜りたい。

#115 (仮称『三省堂大英和辞典』)

『前置詞 (下)』(1955)で初めて小西友七先生の存在を知った。この全 25 巻の英文法シリーズは、中島文雄先生、大塚高信先生などの監修の下に進行した。これまでの日本の英文法研究の、それも新言語学への移行前の“科学”文法の総決算といってよいものであった。そのころ私は大学に入ったばかりで、細江逸記先生の数冊の文法書に感銘を受けていた。シリーズの中では、荒木一雄『関係詞』、木原研三『呼応・話法』などが記憶に残っている。上記の 3 冊はいずれも、のちに大家となられた先生方の若い頃の記念碑的な書物である。東大昭八会メンバーのおひとりであった宮内秀雄先生の『法・助動詞』は実にユニークで、それはそれでよかったのではないか。小西先生の『前置詞 (下)』は日下部先生の

『前置詞(上)』とは異なって、ひとつひとつの事実を丹念に積み上げて、これまでの学説を修正発展させようとしたもので、相当読み応えがあったように思う。荒木先生にしても、木原先生にしても自分の力で創造的に考えられている点がすごかった。しかし私の語学に対する興味はなぜか急速に衰え、文学のほうにのめりこむようになったので、小西先生のことでもそれほど関心をもたなくなった。1958年(昭和33年)に学校を出た私は、何故か三省堂で辞書の仕事をするようになった。この年に編集者として採用された他の二人のひとり高橋昭君は、のちに『言語学大辞典』全6巻、別巻1を企画完成させた大編集者である。第6巻は術語編で、それを除く5巻8,168ページで世界の3千5百に及ぶ言語を扱ったその規模でも世界に類を見ない大辞典である。別巻は文字編に当てられている。次の百年の間にこれに勝る本ができるだろうか。もう一人は小野幹夫君で、途中で退社して、京大博士課程を経て滋賀大で長年教鞭をとった。上の二人と比べると私は能なしで入社した年に『コンサイス和英』に改訂の下働きをして辞書編集の入り口に立った。

佐々木達主幹の大英和辞典(企画番号#115)の担当を命じられ、それまでの担当者であった課長から引き継いだ。まだ原稿の段階であったので原稿の整理は一人でやれということだった。課長からこの辞書の日誌も渡されたが、まさか今になってこのような原稿を書くとはつゆほども思っていなかったもので、引き出しに入れたままにしておいた。したがって、この辞書がいつどのようにスタートしたのかは知らない。木原先生は昭和31年頃にこの本の話がきたように書いておられるからそうでもいいのだが、実際はもう少し早いのかも知れない。そうでないと仕事の辻褄が合わない感じがする。いつか出版庶務課で、契約書の束をひっくり返していたら、この#115の著者間での仕事の分担と印税配分を記した契約書が目についた。その内容は今も憶えているが、締結の日付は知らない。私の乏しい知識では、スタート時点を特定することができない。(小西先生の名はこの文書にない)。原稿は、結局、日の目を見ることなく、たぶん今三省堂の八王子倉庫に併設されている出版局の書庫の一隅に、私が納めたときと同じ状態で眠っているはずである。この辞典のことを小西先生は“幻の大辞典”と呼び、企画中止を知られた時の激しい喪失感と、無駄に終わった壮年期の学者としての十数年間を振り返っておられる。そのことは本辞書学研究会ホームページに掲載されている。

この辞書は1956年(昭和31年)かあるいはもう少し前に、研究社の岩崎民平・河村重治郎編『英和大辞典』(1953)に対抗するものとして企画された。この研究社版の3割り増しで、扱う範囲はEdmund Spenser(1552?-99)まで遡る。語義の配列は歴史的配列とし、発生の時期を世紀の前半と後半に大別して示す。引用句に力を入れる。シェイクスピアの語彙はしかるべきものはすべて採り入れる。その程度の縛りのゆるい約束で、執筆規約も頭で考えられる範囲の約束事を列挙したものであった。これをもとに、ACD(=The American College Dictionary)やNW(=Webster's New World College Dictionary)。さらに随時

Chambers Twentieth Century Dictionary を参照しながら原稿を執筆し、月一回の編集会議を三省堂で開き、執筆上の問題点を出し合って規約に補正を加えていった。細かい点まで話が及ぶことが多く、私が規約の改訂版を作ったときには、30 ページを越す分厚いものになった。執筆に先立って、研究社版の英文学叢書全 100 巻から、大きな辞書に採録されるにふさわしい表現や事柄をカード化してあった。ちなみに Spenser, *The Faerie Queene* (1590) は細江逸記先生が注解しておられる。1921 年(大正 10 年)から 1932 年(昭和 7 年)まで当時を代表する錚々たる学者(市河三喜、岡倉由三郎、土居光知、竹友藻風、石田憲次、澤村寅次郎、等々)によって注解されている。この稿の最後近く、『ウイズダム和英辞典』のはしがきで、小西先生は Matthew Arnold の *Essays in Criticism* からの引用文で全体を締めくくっておられるが、土居光知先生がこの本を担当しておられる。小西先生はこの本で学ばれたのであろうか。

話を元に戻そう。私が引き継いだ 1959 年(昭和 34 年)には、もう 3 割ほど執筆されていたように思う。D 項は、柴田省三先生の担当でほどなく完成してもらった。紙封筒 31 袋に入っていた。何故か袋の数まで憶えている。D 項が完成したころ、語源は語学の天才柴田先生にお願いすることになった。佐々木先生と木原先生とであらかじめ相談済みの人選であったようだが、結局、原稿は一枚も書かれず、会議の席で、佐々木先生が催促されたのに対し、柴田先生はフランス語で皮肉っぽくぺらぺらしゃべって、黙ってしまった。あまりにも突然だったので、その内容が分かった先生はいられなかった。佐々木先生が発言の内容をただされたけれども、答えはなかった。それきり柴田先生は会議に来られない。なんとも奇妙な幕切れであった。そこで木原先生が語源執筆の原案を作り、佐々木先生と協議を重ねて、語源の執筆要綱をまとめられた。ラテン語などにも、従来のように英語訳でなく、できる限り日本語訳をつけて簡潔に記述し、一般の読者に分かりやすいものにするというものであった。実際に記述するときはラテン語の動詞をどのように記述するかなどが問題になるけれどもその辺のことは忘れた。全体の原稿が集まった段階で、語源をまったく一から書くことになった。原稿にある語源は底本の翻訳でこれらは皆破棄したのである。山本千之先生のように助教授クラスの方や東大大学院生など 6 名の方に依頼した。4 年近くかかったと思うが、先生方は一生懸命やってくくださった。

いざ、木原先生から佐々木先生へと出来上がった原稿を回覧する最終校閲(佐野先生、小西先生などの手入れが済み、語源、発音も新しく記入された原稿の主幹による閲読)が始まると、新語源原稿にたっぷり赤字が入って三省堂に完成稿として戻ってきた (D, F, G だけが完成稿になったと思う)。これだけ赤字が入るのであれば、お二人で全部お書きになればよかったのと思った。話がなかなか小西先生のお仕事振りに入れなくて申し訳ないと思うが、ついでに発音のことにふれておきたい。

発音は ACD か何かに倣って、ジョーンズ式で入れられていたのだが、ジョーンズの発音辞典の改訂版が出たり、次々に参照しなければならない本が出版されたので、そのまま組み版に回すわけにはいかず、発音担当の黒田巍先生が新しい記述方式を考案され、人手を借りて実現することになったが、三省堂と主幹で決めた謝礼が安く、黒田先生の回りに

は、その報酬では喜んでやってくれる人がほとんどいなかった。結局仕事は進まず、大東百合子先生が後を継がれることになった。謝礼をいくらか上げたように記憶している。そうして、一番の大項目 S に最後に取り掛かり、半分ほど進んだところで企画中止となった。私の口から中止というのはためらわれた。何十回津田塾大まで会社のバンに揺られて原稿の受け渡しに通ったことだろう。当時、学長だった中島文雄先生に偶然お会いして、「ひさしぶりだね」と声をかけていただいたことも今となっては遠い昔のこととなった。語源にしる、発音にしる、あらかじめ明確な方針が決まっていれば、二重三重の手間がかからずに済み、編集期間も短く、企画が中止されることもなかったかもしれない。しかし、当時は、のんびりとした上のようなやり方でも、社内からも関係する執筆者からも批判は出なかった。今日、このようなあいまいな仕事のやり方は許されない。といっても編集費の累積額は日に日に大きくなって、金くい虫だと役員がぼやくくらいであった。外部の私と親しい人が、「佐々木さんは食べ物にされている」と忠告めいたことを言ったが、私にはそうは思えない。NED 編纂の折に、Sir James Murray がなめた辛酸には遠く及ばないにしても、創造的な仕事には学識も、忍耐力も、経済力も並み外れたものが必要だということではないだろうか。

さて、小西先生のことを話を戻そう。

先生がこの大英和辞典の執筆者のひとりであることを知ったのは、私が担当してしばらくたった 1959 年（昭和 34 年）の夏ごろであった。先生には、big words と称する記述量が多い基礎語の執筆をお願いしていた。それには前置詞の類も当然含まれていた。その big words の選定基準は大まかなもので、対抗辞典が 1 ページの半分以上を費やしている語が一覧表にされていた。（その大まかさがいいのである）。小西先生から最初にいただいた葉書は、上の big words から派生する語の取り扱い方に関するものであった。細かい字で葉書一面に丁寧な言葉遣いで書かれていた。字の書き方が中島文雄先生に似て細かいので、中島先生のような方かと思いついた。ああ、この葉書の主が、学生の頃に読んだ英文法シリーズの著者なのか、出版社に入ると次々に偉い先生方と付き合うことになるのだと、改めて実感した。入社したときの社長訓辞も同時に思い出していた。「著者の先生方が君たちとちゃんと付き合ってくださいるのは、君たちが三省堂という看板を背負っているからだということを忘れないように」。私にはこの法（のり）を超える悪い性質がある。

原稿用紙は 2 百字詰め、たとえば、“do” だと 70 枚ぐらいの量になる。校閲するのは大変で、活字に組んだゲラの状態での校閲をどんなに望まれたことか。ゲラなら、語義の分類の仕方やそれに添えられた用例や注記などの適・不適が一目瞭然となるからである。小西先生の原稿は、木原先生を経て佐々木先生に回されたが、上述の悪条件もあったのか、赤字は少なく、木原先生の紫のインク文字が、佐々木先生のところで消されて、元の原稿に戻されていたことも時があった。要するに、好みの問題だったのかもしれない。いつか小西先生から、「僕の書いた原稿、赤字沢山入ってますか」と電話で訊かれた。「ほとんど入っていませんよ」そのとおりののだが、校閲に回った分も少なかった。

小西先生からの原稿が遅れることはあまりなかった。仕事に傾倒されていることはこのことで分かった。**Big words** は英語の根幹にふれる語ばかりだから、先生の緊張も一様ではなかったと思う。それでも執筆は早く、私が担当して、2年半くらいで終わられたと思う。

つづいて、**同意語解説欄**を執筆していただくことになった。一般執筆者の原稿執筆時には、**ACD** か **NW** の記事を訳しておくという執筆規約であったようだ。後でそれに手入れをして……くらいの考えであったのかも知れないが、小西先生の **big words** が予定にそって完成したので、小西先生に別稿で書いてもらって、差し替えるのをよしと、主幹が判断されたようだ。袋数で6, 7袋だった。この仕事も早く終えていただいた。(後になって佐野先生が校閲すると言われ、世田谷のお宅へ持参した。それを知って、木原先生は、「小西さんはその道の専門家なのだから、佐野さんがいじる必要は無いと思うがね」と感想をもらされた)。

ここで佐野英一先生にご登場いただき。先生は旧制八高で佐々木先生と同級生で佐々木先生に乞われてこの仕事につかれた。名古屋の出で、父君は書家であったときいている。その **DNA** をすっかり受け継がれたのか、先生の字は超達筆であった。企画中止後ずっとたってから、試験的に原稿の一部を工場で入力してもらったことがある。出てきたゲラは毎行何箇所か入力ミスがあり、その訂正をしてまともに読めるゲラにするのに一校必要なことが分かった。文字のことはさておき、先にふれた著者間の契約書(佐々木達、佐野英一、木原研三、黒田巍の4先生間の取り決め)で校閲は佐野先生に一任されていた。全巻を校閲するという恐ろしい契約、佐野先生の意気込み、決意がひしひしと伝わってくる。一方、原稿の多くは佐野先生を喜ばすものではなかった。(私は、悪い原稿はそんなには無いと思う)「この項、以下の15枚と差し替える」的なものが多く、すべてを調べ直し、書き改める作業の連続で、いつしか、「苦役」という表現がぴったりの状態になっていったのではないだろうか。先生の校閲には筆の乱れがない。書き直しもあまりない。かなり複雑な構成の項目でも、調べ上げて得た情報を、頭の中で分析整理し、一つの建築物のように構築し、一气呵成に書き下ろされるのである。50年ほど以前のことを記憶だけを頼りに書いているので、美化しているのかもしれないが、辞書の原稿を操らせて、これほどの能筆家、健筆家を私は知らない。先生は語学者ではなく、日記文学の専門家で、それにもかかわらず、いい仕事をされたと思う(さすがに、**big words** には手を染められなかった)。先生は、物静かな方だった。常に人なつっこい笑みを浮かべ私のような駆け出しの編集者にも優しく接して下さった。私の経験ではそういう人の奥様はすべてすばらしい人たちなのである。ある夏、ご夫妻でヨーロッパを旅された。「イタリアではね、バスの運転手だってみんなハンサムなのね。ついていきたくなっちゃうくらい」などと、奥様がにぎやかに軽口をたたき、横にいる先生もにこにこしておられるうちはよかった。そうこうしているうちに、先生の健筆にかげりが見え始めた。校閲量も減り、ついには、「もうしんどくてこれ以上はできそうにない」と言われたのはいつのことであったか。そのうちに気力を取り戻されると思っていたが、そうはならなかった。全体の4割弱くらい校閲が終わったところ

だった。編集会議が開かれ、佐野先生も続けるけれども、数名の先生方に分担加勢していただくことになった。それぞれの新校閲者の下に助手を置くことも可といふ。小西先生もこの時点で校閲陣のひとりとなられた。中野道雄先生を助手にされた。1963年(昭和38年)ごろだったような気がする。W³ (= *Webster's Third New International English Dictionary*) (1961) が出てさほど間が無かったから1962年ごろかもしれない。「W³もざっと目を通してください」と佐々木先生が指示されたが、そう簡単に目を通せる紙面構成ではないから“ざっと”は実は“よく”という意味らしい。上に立つ人はいろいろと神経を使うものようだ。

小西先生に預けた原稿は着実に処理されていたが、時々滞るようになった。どうもこれは助手の先生の都合によるようだった。謝礼は月々出来高払いであったが、小西先生は、最終的に辻褄を合わせるから定額制にして欲しいと言われたので、そうしましょうとすぐOKをだした。感謝されたようだ。この仕事は前後3年ほどかかったように思う。(これで校閲者は月に大英和の15ページを整える事になるが、小項目は案外むずかしい)。

これら新校閲陣に原稿を回し、その隙間をぬって、語源の仕事、発音の仕事、それから三省堂が請け負った専門語の調査を進めるのであるから、原稿の紛失がないよう、あるいは破損が無いよう随分と気を遣った。

ある時、発音の仕事をしてもらっている方の家が、隣家の不始末で火事になってしまった。吉祥寺市の先生のお宅あたりは夕方のラッシュで大混雑だった。消防車が目的地になかなかいけないのであった。先生は必死の思いで、燃える家から原稿を取り出してくださったが、灰化したページもあり困った。幸い科学警察がそれらを赤外線フィルムか何かを活用して、復原してくださって事なきを得た。他の部署でも原稿の件で、紛失も含めいろいろ事故があったのだろう。会社では、著書から預かっている全原稿をマイクロフィルム化することにした。膨大な出費だったと思う。以上のようにして、牛歩の歩みを続けてきたが、あるとき、突然、本辞典の企画は中止と上層部から告げられた。私は自分の耳を疑った。しかし経営陣は会社の収益の悪化と、資産の売却による損失の穴埋めが限界に来ている以上、経営のスリム化が必要であったのだろう。そのための犠牲となった感が強い。この辞書について言えば、たび重なる著者側からの編集費の追加要求と、それがどこまでエスカレートするか、心配な面があったのは確かだと思う。個々の費用はつましやかだが、全体としては意外なほどの出費になっていくと判断された。会社に力量がなかったのだろう。昭和43年(1968年)の夏ごろのことであった。私は苦慮した。特に、佐野先生や小西先生、それから発音担当の大東先生など、この辞典のために中核的働きをされた先生方に会社の決定をどうお伝えしようかと悩んだ。全身全霊を捧げて、十数年間この辞書の完成を夢見てこられた先生方、研究をも犠牲にしてこられた先生方に私は言う言葉を持たなかった。佐々木先生は会社との話し合いの席で、中止は止むを得ないものとして諒承するが、お世話になった先生方にはこれまでのご協力に対するお礼と、中止のおわびを言う機会を会社として作って欲しいと要望されたが、会社は結局断っている。理屈上は会社の取った態度に落ち度は無いのだろうが、現場で長年先生方と苦楽をともにしてきた私は会社の態

度は非礼なことに思われた。

何度かの機会に、この辞典の仕事の再開ができないかと上層部に打診し、実際に原稿の一部をゲラにして、研究社の英和大辞典第五版と比較してみたりしたこともあったが、あらゆる情勢が編集の再開を許さなかった。ゲラにした部分は、細かく見て対抗書に劣るところはないと結論できる。ただ、ゲラ全体がかもしだす雰囲気、なんというか、old-fashionedなのである。これはどういうことだろうか。中止後の30年の月日は残酷なものであった。綿密な原稿という点で他の校閲者と佐野先生との間には、ギャップがある。ゲラでこの差を埋めるのは可能だろうか。木原先生は、4分の3くらいは出来ていたと思うと言われているが、そのお言葉の通りだろうか。形式上は、発音のごく一部をのぞくと、一応は出来上がってはいる。しかし、すでに見てきたように、語源の校閲、上のギャップの解消など、一冊の辞書としての完成の道程(みちのり)はまだまだあるといった方が正直ではないだろうか、という気がする。人の善意だけでは事は成らないということか。

私たちはまず佐野先生を見送った。先生の柩をあつ雪の朝見送っておられた佐々木先生は、その後10年足らずして、桜の散るころに旅立たれた。小西先生は、奇しくも9月のお誕生日に89歳になって昇天された。

私は、この仕事に前後9年余り関わってきたが、小西先生に実際にお目にかかったのは、不思議と思えるほど少なかった。手紙や電話での連絡が主である。仕事の大きな節目のとき、つまり、佐野先生おひとりでの校閲が、何人かの先生に分散されることを決める会議の 때가一度、それから何かの折にあと一度お会いした。このたった2回だけだったと思う。会議があったその日、慎み深かそうな、それでいて、きりっとした上品な感じの方が3階のエレベータホールから、濃いグレーの背広に身を包んで、われわれの職場のある北棟へ来られるところだった。「編修所の会議室はこちらですか」「ええ」「小西です」「始めまして、中嶋です。いつもお世話になってありがとうございます。遠いところをお疲れでしょう」こんな程度のやり取りがあって会議室へご案内したが、約束の時間には少し間があったので、まだ誰もお見えになっていなかった。会議の席では、先生はほとんど発言されなかったように記憶している。インパール作戦で死と隣り合わせの極限状況にあってなお部下を束ね任務を遂行しようとした若き指揮官、日々地獄のふちをのぞかざるをえなかった人が、そのときの痕跡など微塵も感じさせず、上品で落ち着き、物静かでいられるのが不思議であった。そのころの三省堂の出版庶務課には代々元高級軍人がいた。そのひとり枝田元憲兵大佐は最後まで、その矜持を失うことはなかった。この二人の対照的な人物を今思い出すのである。

佐々木先生がその後『近代英詩の表現』(1971)を出版された時、私は先生にサインをお願いした。サインと共に E. M. Forster からの引用文が書かれていた。He believed in travelling light. 「中嶋君、背負いきれない荷物を無理して背負おうとしないことだね」とおっしゃった。

大塚高信・小西友七共編『英語慣用法辞典 改訂版』(1973)

小西友七編『現代英語語法辞典』(2006)

安井稔先生は常々「Chomsky 読みの英語知らずでは困る」と言っておられた。“常々”と言うのは、私がいた席では“必ず”、そういう発言をしておられたので耳にこびりついているのである。たしかにそういう方々がいらっしゃる。英語の読解力だけでいうと素人と玄人の区別はあいまいである。しかし英語を深く理解するには、語法の知識が欠かせない。同意語間の微妙な差にも鋭く反応しなければならない。文法の知識もある程度は必要である。だからその方面の辞書類も必要になってくる。

小西先生はビルマから復員されてから、京都大学で再び学ばれ、そこへ出講されていた大塚高信先生と出会う。そのことは重要である。大塚先生はもちろん、お若いころ世に流布していた Nesfield や Onions などの school grammar といわれる伝統文法書から、“科学”文法といわれる Jespersen の文法書までの幅広い知見に立って講義されたと思う。「大塚先生の講義ではじめて文法のこと分かるようになった」と小西先生が述懐されている理由は、大塚高信『英文法論考——批判と実践』(1938)を読まれると読者も“なるほど”と思われるに相違ない。小西先生が生成文法の方へではなく、個々の語法の研究に向けて大きく舵を取られた意味が分かると思うのである。これから話を進める『英語慣用法辞典 改訂版』(1973)と『現代英語語法辞典』(2006)はその延長上にある。『新英文法辞典』(1959)を編むとき、語彙文法的なものも加味したいと思って小西君に頼んだら、一杯書いてきて、原稿がたくさん余ってしまったんです。せっかく書いてもらったものを捨てるのももったいないので、追加執筆を他の人に頼んだんです。大塚先生は『英語慣用法辞典』(1961)出版の由来を話してくださった。これと姉妹編の文法辞典が改訂中であつたので、慣用法辞典のほうもよろしくということになり、私が担当することになった。「2百ページ減らしてください」、私はそれだけをお願いした。大塚先生は直ちに私の言いたいことを理解されたのであろう。そのように決まって、「今回は小西君に頼みましょう。改訂版ですから百万円で頼んでおきます」とのことであつた。当時の物価で考えてみると、百万円は5千部の印税に相当する額であつた。この種の専門書が5千部売れるには何年かかかる。不思議に思われるかもしれないが、私と小西先生は、この改訂版が終わった後開かれた出版記念会までお会いした記憶がない。すべては葉書や電話で用をたしたことになる。着手に際しては、原稿をいただく時期と出版時期を申し上げた以外、小西先生と話したことはない。2百ページ減という条件の下で内容をどうするかは専門家の先生が適切に考えてくださると信じていたからである。大英和の仕事を通じての絆は強かったと今改めて思うのである。着手したのが1969年ごろ、アポロ宇宙船11号が月面着陸したころだと思う。原稿は約束の年末をずらして新年1月15日ごろ東京は国鉄の新橋貨物駅に送られた。そのとき、「原稿が整いましたのでお送りします。ゲラが出始めましたら……」とゲラの回

覧順などを指示した速達をいただいた。この原稿は駅止めになっていたはずなのに、数日後私が、出勤するとデスクの上に大きなダンボール箱が置かれていた。その日のうちに原稿整理にとりかかり、2週間ほどで全一巻分を工場に送ったら、工場でも待ち構えていたように組版を始め、原稿到着後1か月ほどで初校が出始めた。「勝手に文字が変えられていると、文句が出ています」と小西先生より。編集ものの用字用語を整えるのは出版社の仕事である。それより驚いたのは用例文の誤訳である。(南出先生は、昔のことだから書いておいてもいいでしょうと、鷹揚に言われるが、「何か例をあげられますか」と訊ねられてもねえ。大昔のことですからね)。当時の課長と私とで、それぞれが全巻を通して読み、ゲラは、小西先生に送った。本が上梓されたあとで、先生いわく「訳のことは言ってくれたけれども、内容は見てくれませんでしたね」。こちらは英語学の専門家ではございません。ようやくページアップのところまで漕ぎつけたときに問題が生じた。Quirk et al, *A Grammar of Contemporary English* (1972) が出版されたのである。Jespersen などの文法書とは異なり、口語を含む現代英語の6百万資料体を基に分析記述された文法書で、出版前から大評判になっていた。イギリスでいち早くその内容の紹介記事を書いた人もいた。先生から東京で手に入らないかと言われ、書店に注文したのでは時間がかかるので、ブリテイシュ・カウンシルに問い合わせたところ、確か、2, 3日まえのパウチできていたと思うと言って捜してくれた。航空便で取り寄せ次第お返しするからと頼み込んで、貸してもらった。先生に報告すると大変喜んでもらい、すぐに「南出君が本を読んで必要なことを書き込んでくれるといっています」と返事があった。すぐに送ったが、現行版ほどではないにしても千百ページの大冊なので、ご苦労なことと思った。これだけ騒がれた本の内容を反映しなければ出版と同時に古い本との烙印を押されかねない。課長はまた本の出版日が遅れると渋い顔のしっばなしだったけれども、この本を十分参考にする必要性を確信して、仕事を押し進めた。従来 of 文法書とは構成も異なり、大仕事になったであろう。南出先生の奮闘に今も頭が下がる。Quirk et al の本は索引が悪かった。その経験からも、親切なものを作らなければとの小西先生の思いは強かった。二人の大学院生にカード起こしを依頼された。そのとき、大塚先生からのお金は、底をついていた。「もう少し出していただくように話しましょうか」と訊ねると、「何とかします」とのことであった。夏休みがあけた頃きれいにタイプされた索引が送られてきた。部厚いものだった。衣笠忠司、赤野一郎の2先生に感謝しなければならない。書名、編者表示は大塚先生のご意向で、『英語慣用法辞典 改訂版』、大塚高信・小西友七共編と決まった。「小西君は語法の研究ではいまや日本一だろう」と言われ、当時、76歳であった大塚先生は後事を小西先生に託されたのであった。出版祝賀会は、1973年(昭和48年)の秋に大阪ロイヤルホテルで開かれた。小西先生が、「われわれだけでやっていたらひどい本になるところだった」と例の誤訳の件をスピーチの中で取り上げられたのにはびっくりした。何もこのお祝いの席でと多くの方が思ったのではないか。『現代英語語法辞典』の仕事が始まったころ、ふとしたことで、この祝賀会の全員写真が手に入って、先生方に拡大したものを送ったことがある。大塚先生、小西先生が貫禄たっぷりのお姿で中央に、お二人を囲んで若い生新の気に富んだ先生方が写っている。今は一

家をなしている方々は、小西先生のスピーチを愛のむちと考え、その後の精進につとめられたのであろう。祝賀会もそこそこに役員の小林氏はその日のうちに東京へ帰った。会社の状態があまりかんばしくなく、翌朝に役員会があるのだとのことであった。私は小西先生と有志の先生方と大阪駅のコーヒー店で、英和辞典のことなどを話し合った。河野守夫先生が初級英和のカタカナ発音を強く批判して譲られなかったのには弱った。小西先生があれは便宜上のものだからと助け舟を出してくださった。さもなければ、私は延々と続くお話に付き合うことになっただろう。日を改めて小西先生ご夫妻と食事をした。奥様の内助の功があってこそその小西先生だと思っていたからである。奥様は上手にはいえないが、おやさしい、若い人の恥じらいを多分に残した実に正直なお方である。そうして、小西先生がよく言っておられた **simple life** を忠実に守っておられるようである。その日は遅くなって東京へ帰れなくなった。「うちへ泊まってもいいですよ」と言ってくくださったが、そうもいかないで、ホテルに泊まると言うと、先生は夜の街を歩いてあちこちのホテルを探してくださるのであった。結局、“学士様が泊まる所”と昔から評判のオリエンタルホテルに投宿することになった。先生ご夫妻と別れ、フロントでよく話を聞くと、今夜はダブルのお部屋しか空いてないと言うので、やむなく、そこに泊まった。翌朝お礼にお宅へ伺って、「ダブルベッドの部屋に泊まったら何だか沈み込むような、ぐずぐずのベッドでした」と報告すると、先生は大声で笑い出されて、別室の奥様に、「中嶋さんひとりでダブルベッドに寝たんだって」と声をかけられ、なおもおかしそうに笑っておられた。今となっては懐かしい思い出となった。

さて、余談が過ぎた。急ぎ足で小西先生最後の専門書となった『現代英語語法辞典』(2006)へ話を移すことにする。1979年(昭和54年)、大塚先生がこの世を去られ、英語学界における世代の交替は誰の目にも明らかになった。安井稔先生は恩師への弔辞を声をつまらせてお読みになった。もうあれから30年近い年月がたっている。まったく嘘のように思える。私は、大塚先生編の2冊の辞典に代わる本を考えていた。生成文法を中核とする新言語学の成果と **Jespersen** に代表される伝統文法とを融合させた新しい文法辞典を作るのは今しかないと考え、まず荒木一雄先生、ついで安井先生を訪ね、お二人に編者をお願いした。井内長俊さんといっしょにこの企画をスタートさせたが、2年ほどで私は和英辞典に専念することになり、それから先の8年間は井内さんが担当して独力でまとめあげた。新しい慣用法辞典を小西先生にお願いしたのは文法辞典が組版に回る頃だったと思う。そのうちご都合のついたときぐらいのお願いの仕方であった。1992年(平成4年)春、文法辞典が上梓されたの期に、小西先生に正式に慣用法辞典をお願いした。少数精鋭主義でやりたいこと、世紀末中の刊行を目標にすることを言われた。三省堂は、前版の改訂ということではなく、先生独自の本をお作りいただきたいと申し上げたが、先生は大塚先生との共編本の改訂とのお考えが強く、何年も”改訂版“といっておられたような気がする。井内さんは、大きな文法辞典のすぐ後、安井先生による簡易文法辞典、荒木先生の英語学用語辞典に取り組み始めたので、慣用法辞典には入ってもらえなかった。もし最初から井内

さんと二人で担当すれば、もっと早く本にできたと思うのである。1992年秋になって、11名の執筆者を決めたのご通知をいただき、八木克正先生が主になって進行させてくださるとのことであった。岸野英治先生に同意語部分の統括を頼まれたのか、当初の執筆メンバーの中のお二人は岸野先生推挙の方である。そのお一人の巻下吉夫先生は、私と大阪外大で同期入学の畏友好田実さんと同僚だと聞いて、なんとはなしに気が楽になった。やがて、八木先生から執筆項目の一覧表が送られてきたので、執筆者間に回覧して、好みの項目を選んでいただいた。先に回覧を受けた人が、後の人よりも自分の好みにあった項目が選べることになるが、これは致し方ない。今回は署名原稿にした。就職の折に業績となるからである。(無記名原稿だと、出版社が何を執筆したのかを証明してあげる必要がある)さて、実際の進行は思うにまかせなかった。主幹が片腕とされていた八木先生がなぜか思うように動いてくださらなかったり、執筆者の多くが、引き受けた項目を書く時間がないと、大量に“放出”されることになったりで、進行が頓挫し、世紀末までの出版は不可能になった。私自身も『ニューセンチュリー和英辞典』の改訂で忙しくしていたので、葉書で進行を督促したりするくらいで、とても関西のあちこちに散らばっている執筆者を訪ねて回る時間などなかった。また初期のころに来たある小項目の原稿は、楽しくは読めるのだが、あまりに冗長なので、小西先生にこの執筆者にもっと簡潔に書くよう言ってほしいとお願いしたら、これでいいじゃないかと取り合っただけでない。しかし、本になってその項を引いてみると、執筆者名も変わり、文章も半分ほどになっていた。1996年4月(平成8年)に神戸で編集会議が開かれた。この年私は2度目の定年を迎えていたが、さらにもうしばらく社に残ることになっていた。しかし、この辞典の完成はまだ先のことだったので、このあたりで、仕事のバトンタッチをしておきたいと思い井内さんに頼んだところ快諾してくれたのでほっとした。小西先生は、持病をかかえておられ、長時間の緊張を必要とする会議はさけられるようになっていた。冬に編集会議を開いて欲しいと言うと、今は寒いからもう少し暖かくなってからとか、夏は夏でももう少し涼しくなってからと言われる。“慣用法辞典の改訂”では初めての会議であった。このときは、奥様がタクシーで送ってこられた。会議の後のランチの席で歓談していたら、突然帰るといわれ、岸野先生ともうおひとりがタクシーに同乗してお宅までお送りした。丸井晃二郎先生に「いつも変わらないね」と声をかけておられた。私の目には、この時の丸井先生はひどく年寄りに見えた。丸井先生は、それから何年もたたず急逝されたと井内さんから報らされた。丸井先生はこの辞典の2百項目ほどを確かな筆で書いてくださっている。井内さんは、文法辞典で手腕を発揮したが、この辞典でも期待通りの働きをした。彼は“待ち”の編集者である。上記の編集会議で私との交替の挨拶の中で「私は督促はいたしませんから、よろしくご執筆ください」と言ってのけた。しかし、その後も進行は遅かった。また一方で小西先生からもう倍ほどの項目をふやしたいと言い出され、そのために、執筆者も校閲者もさらに増やす必要が出てきた。いつの日からか八木先生も復帰してくださり、専門語項目、語法項目も柏野先生と鋭意執筆してくださり、岸野先生の同意語項目も整い、校閲者も以上の先生に何名かの方が、加わられてしだいに動きがよくなっていったのではないだろうか。この間実際に

どのように仕事が進んだのかは、井内さんに聞いて見なければ分からない。1997年（神戸での会議の翌年）、先生は80歳になられているが、それからの年月は決して平坦ではなかったように思えるのだ。文字通り“難行苦行”の日々であったのかもしれない。2005年（平成17年）秋に校了となったが、会社の都合で、2006年4月に発行された。専門書であるから出版の時期は選ばないと思う。もっと早く出版して先生に少しでも長くこの本を愛でていただきたかった。

小西先生は弟子の成長を楽しみにしておられた。大学の講義のあと、学生たちとお茶しながら、語り合い討論しあうのが楽しいとよくいっておられた。先生は出講されていた遠くの学校でも学生の質問に丁寧に答えて、気がつくとは日は暮れていたということもしばしばであったと聞く。人を育てるといって優れた先生であった。人を育てるには自分の全人格を相手にぶっつけなくてはならない。先生は偉ぶるところがなかった。数段上の人という印象を与えなかった。すぐ隣の人のように思えた。だから学生は思うことをストレートに、なんの壁も感じずに話すことができ、先生のお人柄に包まれながらさまざまなことを吸収していくことができたのだと思う。南出康世先生が『英語の辞書と辞書学』（1998）を出されたとき、「南出君の本を読まれましたか。立派な本を出されて、わがことのようにうれしい」と私への葉書に綴っておられる。慈父と言うべきである。アガーペに満ちた人である。

またまた脱線したが、元に戻ろう。この本の内容にもふれたい。この本はいい。『英語基本動詞辞典』（1980）は小西先生の絶頂期の作品である。この本が出たとき、ある評者は、編者をこれまでに英語に傾倒させるものはなんだろうか、とその不思議さを率直に述べて書評を結んでいる。それは英語と言う言葉に魅せられた魂の果てしない彷徨だと私は思うのだ。先生最後の語法書となったこの辞典も同じ魂とそれを継ぐ志で作りに上げられている。この辞典には、旧慣用法辞典からの執筆者4名が含まれている。アイウエオ順に紹介すると、河野守夫、中野道雄、南出康世、八木克正の方々である。河野先生は慣用法辞典の話でもちょっとふれたが、音声学で、**Pronunciation and usage**を書かれた。最初の原稿は大論文で、この辞典に入れるにはあまりにも長大で、井内さんは困って小西先生にカットを命じて欲しいと泣きついた。先生も困られたようだが、意を決してカットを要請された。今の記事がその結果で861－875ページまでである。音声学の専門家は厳格で、編者が内容をいじくったのが気に入らなくて、本になった後でも、元に戻すよう言って編者を困らせていた人がいる。（これは河野先生のことではない）。中野先生は『動作と行動の意味論』（2002）で博士号をとられた碩学で、この辞典では、**Translation and usage, Culture and usage**などを書いておられるが、それらは先生の数多い著書をふまえた味わい深いものである。読者の方々には、ぜひ先生のご著書に直接ふれていただきたいと思う。文章の上手な人である。南出先生は、『ジーニアス英和辞典』や『ジーニアス大英和辞典』などで小西先生と共編者であることは広く知られている。執筆項目のひとつ **Lexical**

phrase は辞書編集者にも興味ある一項であろう。Usage in dictionaries では実務家らしい悩みも打ち明けられている。八木先生は、この辞典の出版と時を同じくして、『英和辞典の研究—英語認識の改善のために』（2006）を出版しておられる。長年にわたる英和辞典執筆の中で生じた問題を論考させられたものだが、本辞典中のさまざまな項目で、先生の探究心を垣間見ることができる。一般辞書で感覚的に記述されている Whether or not /no についても、統計的な検証をして読者を納得させる。一方、Why to do では堂々と自説も展開される。八木先生の執筆項目には新しい項目が多く、先生の英語への目配りの広がりを感じさせられる。次に柏野健次先生のこの辞書でのご活躍にふれたい。執筆者項目の多さはもちろん、校閲者としての奮闘ぶりは、旧版で南出先生が示された熱意と献身に匹敵すると、井内さんから聞いている。先生はご自身で長年の間に蒐集された膨大な用例を惜しみなく執筆に、校閲に使って、いかにも語法学者らしい。コーパス活用が日常のものとなると、自らも個人の研究用コーパスを作られる。カードの時代は終わったと思う人が多いかもしれないけれども、私はそうは思わない。語学的な flair がない人にコーパスを与えてもそれは単なることばのごみ捨て場でしかない。Jespersen は今もよく読まれているのだろうか。Poutsma のあの 5 巻本はどうなっているのだろうか。“目利き”の人たちが一枚一枚集めたカードは有用で、たとえば Fowler の語法辞典では Burchfield 先生は自ら数多くの用例を本を読んで集めておられる。もちろん、OED の Supplement 4 巻の編集責任者でもあり、OED の改訂資料も必要に応じ活用させてもらえるという好条件に恵まれているが、もう一例を挙げよう。The Longman Dictionary of Contemporary English (LDCE) は、初版の時には間に合わなかったカードを活用して第 2 版が編集されている。その数、百万枚という（Della Summers さんの案内で見せてもらった）。第 2 版が飛躍的に改善されたのはご存知の通りである。

岸野英治先生は、同意語の見本原稿を作成するにとどまらず、進んでむづかしい項目を数多く執筆されている。見本原稿が届いたとき、小西先生に「岸野先生は張り切っていますね」と水を向けると、「これでうんと勉強しておいて和英の改訂のときにその成果を反映させてもらえればいいと思っています」と言われた。岸野先生は論の進め方が鮮やかで、その記述は明解である。共起制限のみならず、意味と構造の関係から同意語間の差異に迫れないかと試みられる。丸井晃二郎先生、神崎高明先生、巻下吉夫先生も共に尽力された。前版の執筆者 11 人中女性は三宅胖先生おひとりであったが、この版では 40 人の執筆者中 11 人が女性である。有能な方ばかりと思うが、旧知の高増名代先生にご登場いただくことにする。先生は『英語のスウェアリング』（2000）の著者である。副題に、タブー語・ののしり語の語法と歴史、とある。3 百ページの大著である。You bloody fellow! と言われるだけでも恐ろしいのに、これらのことばを微に入り細をうがう研究に脱帽あるのみ。Swearing は短いけれども積年の研究の上に立って書かれている。もう少し長く書いてほしかったと思う。同じように、もう少し手厚く書いてほしかったのは、菊池繁夫先生の Stylistics and usage である。私のような素人の読者は、あれこれ分かったような気分になりたいものである。ないものねだりということかもしれない。その他の項目も基本動詞辞

典に始まるシリーズで小西イズムを身に付けられた先生方の執筆によるものが多い。

最後になったが、小西先生は **Basilect (in Black English)** という項目を書いておられる。先生はお若いころから **Black English** に興味をお持ちで、*Uncle Remus* のテキストなど、すき間もないほど書きこみのあるものを見せてもらったことがある。先生はアメリカへ留学の折も、わざわざ南部まで行かれ、見聞きするもの皆珍しく、あらゆる機会にメモを取られたと、同行のお嬢様から伺った。

英語を知るにはアメリカやイギリスに長らく生活する必要があると思っておられ、“海外生活者” ということばを使って、そのような経験のある人をうらやましく思っておられたようである。『新クラウン和英辞典』の山田和男先生も同様であった。サンフランシスコに半年、東京に半年という生活が山田先生の理想であった。お二人ともそのような生活とは無縁のうちに生涯を終えられた。小西先生からある時いただいた「黒人英語の起源と脱クレオール化をめぐって」(1986) と題するハンドアウトが今も私の机の上にある。

(続)